

幽霊が毎晩
寝かせてくれない！

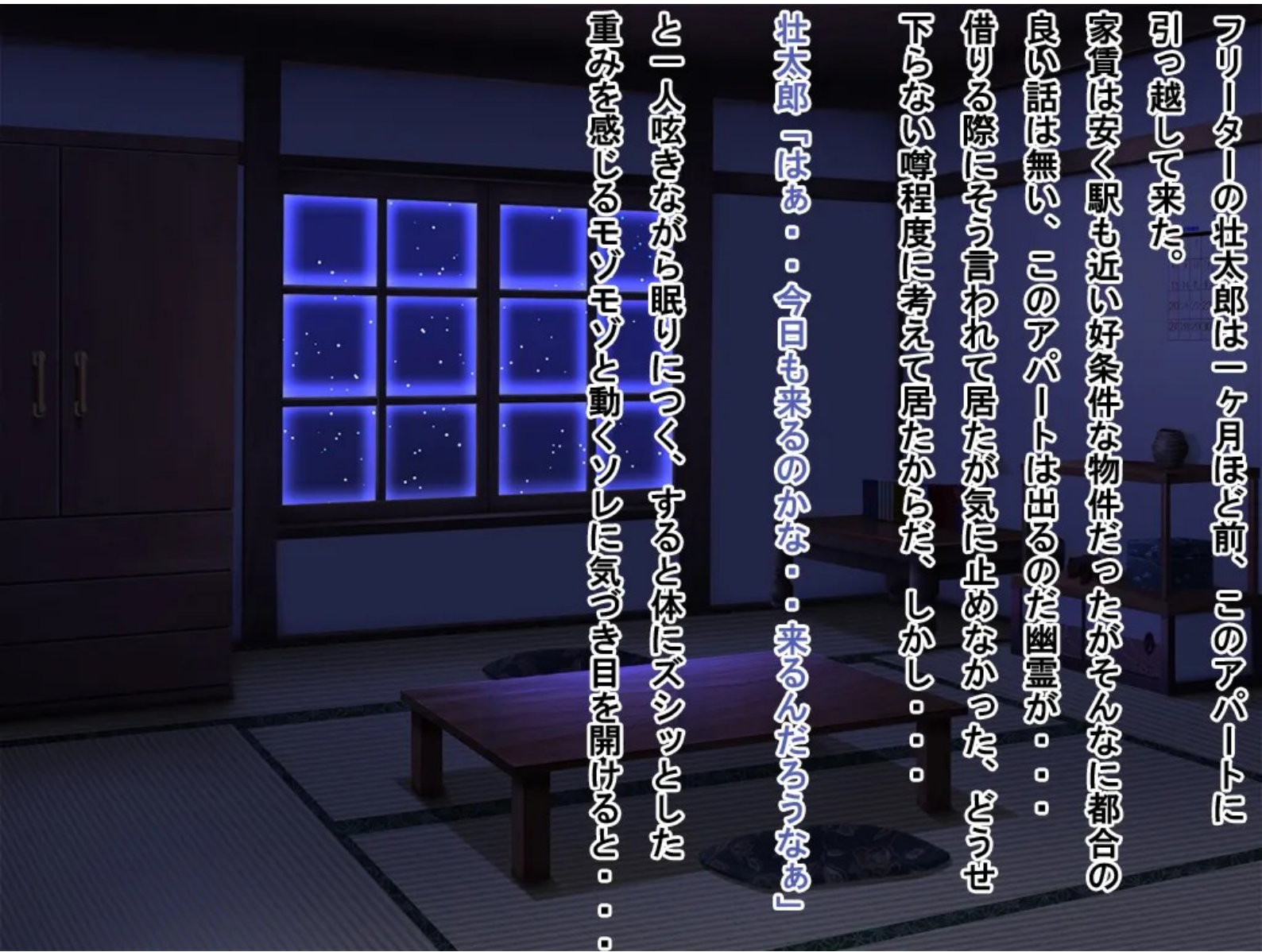


フリーターの壮太郎は一ヶ月ほど前、このアパートに引っ越して来た。

家賃は安く駅も近い好条件な物件だったがそんなに都合の良い話はない、このアパートは出るのだ幽霊が……。借りる際にそう言われて居たが気に止めなかった、どうせ下らない噂程度に考えて居たからだ、しかし……

壮太郎「はあ……。今日も来るのかな……。来るんだろうなあ」

と一人呟きながら眠りにつく、すると体にズシツとした重みを感じるモゾモゾと動くソレに気づき目を開けると……









ん？壮ちゃんおはよ
今日もビンビンだね

やっぱりハルか…

この娘がその幽霊だ、ハルという名前らしい見ての通り

ハルは夜な夜な出てきては壮太郎を襲ってる。





ここは正直だもんね
いただきまゝす

いい加減につくっ...





あっんっ壮ちゃんのこと
良いつ気持ちいいよ

グッ
グッ

くそっ!
気持ち良いつ



ハルの一方的な行為になすすべのない壮太郎だが
その気持ちよさから受け入れてしまっている自分に
気づいても居たのだ。



ハル「あゝすっきりした♪」

壮太郎「あのなあゝ。。。いい加減にしろよっ」

ハル「気持ちよくなかった？」

壮太郎「うっ。。。それは。。。」

ハル「ふっふっふっ気持ちよかったんだ？」

壮太郎「だ、大体なんで俺なんだ？別に誰でも良いならっ」

ハル「ひ・と・め・ぼ・れ♪かな？」

ハルはそう言いながら屈託のない笑顔を向ける。



壮太郎はこの笑顔に弱かった、しかも好みのタイプだったからかいつも許してしまう、そういう意味では取り憑かれて居るんだろうと思っていた。

壮太郎「兎も角。。。なんだ。。。その。。。俺の体を好き放題

おもちゃにするなよ」

ハル「うゝん。。。いゝやっ」

そう言い残してハルは消えていった。

壮太郎「まったく・・・可愛いな・・・」

最初こそ幽霊という事もあって恐怖心もあったが
回では否定していてもハルに会える日が嬉しかった。



次の日、壮太郎は連日ハルのせいで寝不足になっていた。

壮太郎「ふあああつ……。ねみつ……」

吉森「ぶひひっずいぶんお疲れでぶねっ」

壮太郎「うわっ……。って吉森……」

吉森は壮太郎の友人で同じアパートに住んでいる住人だ。

吉森「ぶひっ……。ふむふむ……。壮太郎君……。憑かれてるね」

壮太郎「はっ!?!」

吉森「やはり出るといふ噂は本当だったでぶねえ……」

壮太郎「わ……。わかるのか……。?」

吉森「僕ちん、とあることがきっかけでそういうのが分かる様になったでぶっ!」

壮太郎「ほ……。ほう……。だが……。違うぞ……。普通に

寝不足なだけだ……」

こいつが絡むと碌な事になりそうに無いのではぐらかす事にした。



吉森「女の娘ですねっぶひひっ・・・」

壮太郎「!？」

ボソッと呟いて去っていく吉森を思わず見返す。

壮太郎「(あいつ・・・本当に・・・?)」

壮太郎「いや・・・まさかな・・・」

この時はそんな筈は無いと思い込む事にしたのだが・・・



ハル「ぶっっっ」

壮太郎「なんだ今日はこ機嫌斜めだな？」

ハル「あの吉森って人嫌い……」

壮太郎「えっ……じゃあ本当に……」

ハル「うん……私の事見えてるみたい……」

壮太郎「そうなのか……まあだから何だって話だろっけと」

ハル「嫌な感じがするだもん……」

壮太郎「まあここに居れば問題無いだろ？」

ハル「そうだけど……」

壮太郎「それより今日は金縛りにしなくて良いのか？」

ハル「……今日はサービス……」

壮太郎「ほほう（これはチャンスだっ）」

ハル「壮太郎が逃げないならねっ！」

壮太郎「ふふふっそんな事はしないさ……むしろ……」









わっわっ壮ちゃんっ
あっんっすごいっ

いつもの
おかえりだっ!



壮ちゃん・・・もつと
優しくっ・・・あっあ

おっぱい・・・
くっ・・・良いっ

グ
ン
グ
ン
グ
ン



いいよもっと突いて
壮ちゃんを感じさせて

グ
ン
グ
ン
グ
ン

本当に幽霊かよ
やべっ・・・っ



あっんんっはあはあ
良いっっ・・ああっっ

いつもより・・
くっ・・これは

此処ぞとばかりに普段の鬱憤をぶつける壮太郎だったが
一方的にやられるのと違い普段より遥かに興奮してしまい
気が付けば果てて居た。





壮太郎「あれ・ああそうか・昨日は・ふふっ・

いつもと違って・って言うてる場合じゃないな

そろそろ出ないと遅刻しそうだ・」

慌てて身支度を整え出かけて行った。



ハル「出かけちゃった・・あぁゝあ暇だなあ・・・
昨日の壮ちゃん・・何だか可愛かったなあ・・
えへへっ」

一人残されたハルは昨日の事を思い出しニヤついていた。

ハル「……遅いっ！ 壮ちゃん……何してるんだろ……」
帰りの遅い壮太郎に苛立ちを見せるハル、その時扉が開く
音が聞こえた。

ハル「あっ！ おかえり……えっ！？」



吉森「やっぱり居たでぶっっ」

ハル「なっ・・・なんであんなが・・・」

吉森「壮太郎君ならまだ帰って来ないでぶよ？（バイトが

長引くのは調査済みでぶう）」

ハル「えっ・・・なんでっ・・・出てってよっ」

吉森「そうは行かないでぶっぶっひひっ」

そう言っつと吉森はハルに近付き抱きついた。









ひっ嫌っ何こいつ・・・
触らないでっ壮ちゃん
助けて・・・っ

一度幽霊として
みたかったでぶっ
丁度いいでぶ♪

本来なら幽霊であるハルは姿を消すなど方法はあるのだが
吉森の力かどんだん力が抜けて行き抵抗すらままならない。



いやっうう...やだっ
触るなあゝゝ

ぶっひひっ
幽霊でもおっぱい
柔らかいなあ









ぶひぶひっっ
気持ちいいでうう

アッ
いっ

ko

ko









ぶひひっ次は下のお口を試すでふう

壮ちゃん・・なんで来てくれないの？









抵抗しても無駄でぶっ
こんな・・・啜えて・
ぶひっ・・はあはあ

壮ちゃんじゃない
人の・・やだあつっ

あ

ブブブ







うん

ズブズブ

ぶひっどんなに
口では拒んでもこっちは
嬉しそうでぶっ



うん

ズブズブ

うん幽霊ま〇こ
最高でぶっつぶひひっ
気持ち良いでぶか？







ううやだやだあつ・
こんなの・やだよお

そろそろ僕の濃いゝのを
出してあげるでぶっ♪

イッ
4
イッ



イッパイ
4人

壮ちゃん壮ちゃん・・・
ひぐっ・・・あっあっ

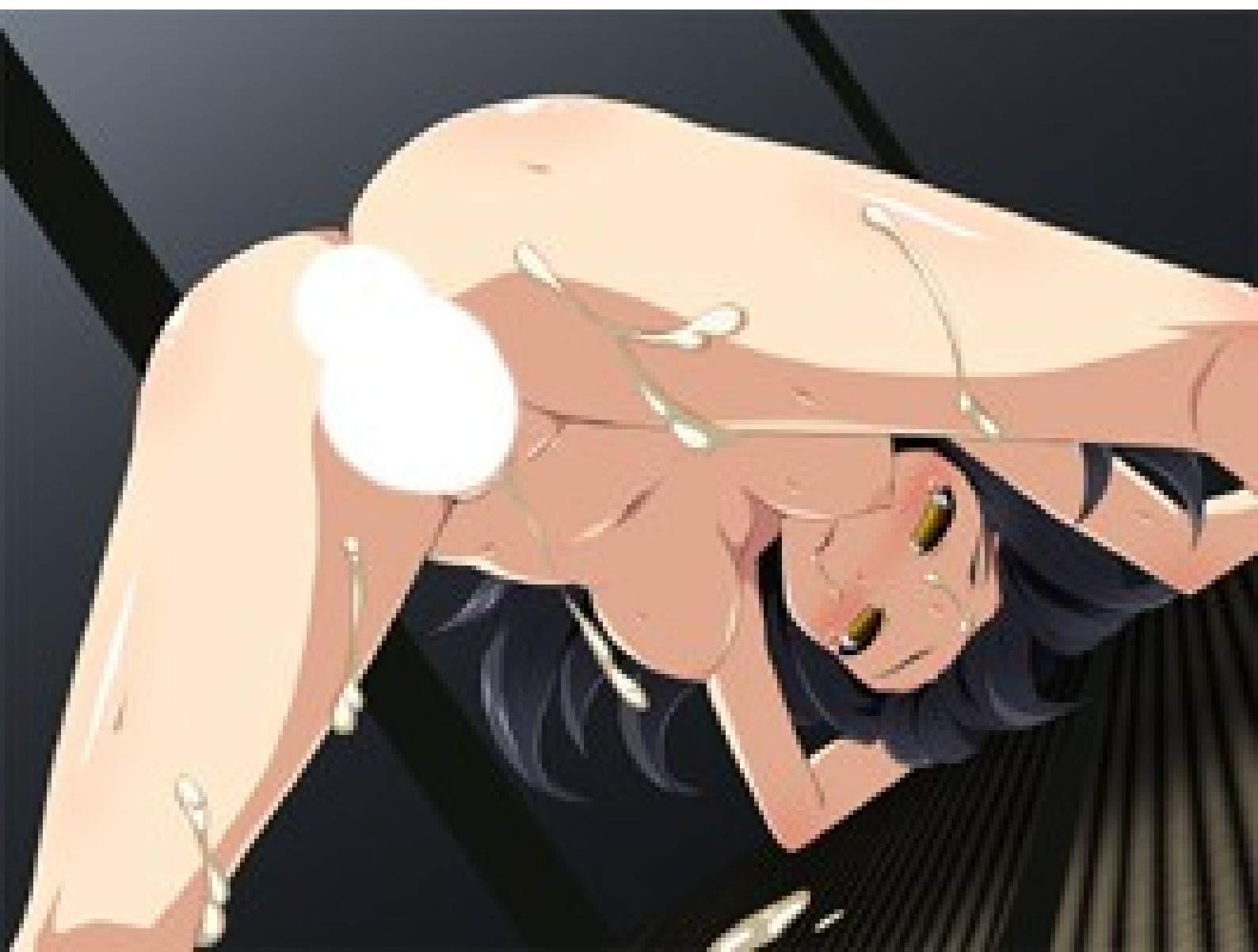
奥にたっぷり出すでぶっ
幽霊は孕むでぶか？





吉森の一方的な行為はこの後も続いた、抵抗できない程弱ったハルの体を貪るように突き続けた。







ぶひいゝ気持ち良かった
あつこを忘れてたでぶ

.....



ぶひっこれで全部の
穴を犯してやったでぶっ

ブ
ブ
ブ
ッ



ぶひひっ幽霊の穴は
気持ち良かったでぶよっ
最後に・・・



最後の一滴までハルの中に流し込み満足した吉森は次の瞬間
後ろの方へと飛ばされる。

壮太郎「何してるっ！」

壮太郎が帰って来ていた、扉を開けこの情景を目の当たりに
した壮太郎が吉森を引き剥がしたのだ。

吉森「ぶひっ!?!これは。・その。・壮太郎君に憑いてた
霊を懲らしめてやろうと思っただけでぶっ」

壮太郎「ふざけんなっ!出てけっ!」

ハル「そう。・たろう。・?」

壮太郎「ああつ。・ごめん。・こんな事になってるなんて」
誰にも想像できなかった悲劇の前に壮太郎は謝るしか
なかった。

ハル「えへへ。・壮ちゃんだ。・。・。」

ハルは吉森の力の影響と酷い事をされた事もあったか
その小さく微笑むと消えて行った。

壮太郎「ハルーっ!」

ハルを呼ぶ声だけが残った。

―数日後―

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25
26	27	28	29	30

ハル「ねー壮ちゃんエッチしよう♪」

壮太郎「お前なあ・・・本当に心配したんだぞ？」

ハル「だって」

ハルはその後しばらく姿が見えなかったが吉森の影響が消えたのか何もなかったかのように姿を表した
負い目のある壮太郎があまり拒めないのを良い事に
今まで以上に積極的になって居た。

壮太郎「今は昼間だし忙しいから大人しくしてろよ」

ハル「今は？夜だったらいいのー壮ちゃんのえっち」

壮太郎「ぐぬぬっ・・・と、兎も角・・・」

ハル「兎も角？」

壮太郎「今はこれで我慢しろっ」









普段の積極的なハルと違って新鮮な反応だった
思わず可愛いと思ってしまっ、はやり俺は取り憑かれて
居るのかも知れない……。が構わない、ハルが傍に
居てくれれば。

余談だがあれから吉森の姿を見ていない部屋にも居らず
様子を見に来た管理人に聞かれたが分かる訳もない
どこに行ったのだろうと考えると背筋に寒気を感じるので
考えるのは止めておく事にした。

おわり

































